

## 哺乳類の珍奇な新種と 火星人がかつて現実世界へ侵入した話

宮内伸子 (みやうち のぶこ)

何を読んでいるのかと問われて、「言葉、言葉、言葉」と答えたのはハムレットだったが、インターネットという媒体出現後の私たちは以前にも増して、ハムレットのこの台詞に共感を覚えるようになってきているのではないだろうか。

ところでその、ここかしこに氾濫する言葉が、目的や領域ごとに区分けされていないのは、不思議といえば不思議である。事実を報告する言葉、幻想を語る言葉、嘘をつく言葉、真実を述べる言葉、どれも共通である。どれにも同じ用語が用いられる可能性がある。それぞれの領域に専用語があるわけではない。ノンフィクションにもフィクションにも同じ言葉が使われる。

それなのに私たちはことさら不安にもかられずに、毎日言

著作が本物の学術報告書でないのは明らかだが、なかには本気で受け取ったり、一杯食わされたと知って怒った人もいたという（この書物に対する世間の反応は、ゲイステ著『シュテュンプケ氏の鼻行類』に詳しい）。

モルゲンシュテルンのナゾベームはこうして現実の領域にふざけて侵入を企てたが、やがて詩の領域へ戻っていった（今なお、かつがれる人が時にいるようではあるが）。さて、火星人もある意味では地球の現実世界に侵入したことがある。次にそれを紹介しよう。

社会心理学の古典的文献の一つ、キャントリル著『火星からの侵入——パニックの社会心理学』をご存知だろうか。一九三八年のある日のこと、当時でもすでに古めかしく思われていたはずの物語を、多くの人々が現実のものとして受け取ってパニックに陥るといった事件がアメリカで起きた。H・G・ウェルズの『宇宙戦争』をもとにしたドラマをラジオで放送したところ、全米の数百万の人々が、火星人が地球に来襲したと本当に信じこんで、泣き叫んだり、逃げまどつたりする騒ぎになったのだ。十九世紀末に書かれた古臭いSFの、あるいは単なるラジオの娯楽番組のどこに、そんなパニックを引き起こす力があつたのか。この騒動の原因は、ドラマがニュースとして受け取られてしまった点にあるという。番組開始

時と接している。それはなぜか。テキストには通例、領域を示す標識がついているからである。新聞記事を読めば、私たちはこれは事実の報告だと思う。小説と銘打つてあれば、どれほど残酷な描写でも、虚構なのだとしていられる。もしこの標識が何かの事情ではずれていたら、あるいは意図的に別の領域の標識がつけられていたらどうなるだろうか。

ドイツの詩人、クリステイアン・モルゲンシュテルンは、ある時、ナゾベーム（鼻行類）を詩にした。この動物が鼻で立つて、子どもを連れてゆつたりと歩くさまをうたつた。詩人の死からおおよそ五十年後の一九六一年、シュテュンプケなる研究者の名前で、『鼻行類——新しく発見された哺乳類の構造と生活』という書物がドイツで出版された。鼻行類に関する世界初の報告書とのふれこみで、この動物について詳細に分類・図示・記述している。これによれば、モルゲンシュテルンの詩に登場するのは、多鼻類のうちの四鼻類である。シュテュンプケの報告書は学術論文としての体裁を整え、参考文献リストにも五十余のものともらしい書名を並べている。モルゲンシュテルンの詩集『終首台の歌』まで載っている！ 実は、この一冊だけが真の参考文献なのだ。なぜなら、詳細なこの報告書のすべてが、モルゲンシュテルンの詩をもとにしたフィクションなのだから。きちんと読めばこの

時に、「H・G・ウェルズの『宇宙戦争』をお送りします」とのアナウンスがあつたのだが、途中から聞いた人にはこの標識は届かなかつた（もちろん最初のアナウンスを聞き逃した人が皆、信じてしまったわけではない）。そして非常に迫真的にドラマが作られていたこと、ラジオが重大発表のメディアとして位置づけられていたこと、それに当時の時代背景もあいまって、物語が現実世界に越境するという混乱が起きたのだった。

インターネットという媒体を手に入れて以来、私たちは膨大な情報（その中心はむしろ言葉だ）に容易に到達可能になった。また個人による情報発信にとつて、ホームページの登場はまさに画期的である。ただ、情報の発信者には、ぜひともみずから鬼編集者の役割も兼ねてもらいたいと思う。言葉、言葉、言葉。言葉はもう十分に氾濫しているのだから。一方、受信者としては、不用意に情報を検索すれば、玉石混じりどころか味噌も糞もいっしょくたに呈示される状況の中で、心ならずも清濁併せのむような羽目に陥らないようにしたいものだ。テキストの領域を示す標識ばかりに頼らずに、言葉が表現する内容を見定める力をつけなければ、不在の火星人がまたしても現実世界へ侵入してくるかもしれない。

（富山大学人文学部／ドイツ文学）